

「高校教師の学級経営
—最高のクラスをつくる仕事術—」
栗田正行著 明治図書



現役高校教師の栗田先生が、ご自身の体験を基に著す学級経営の心得やポイントの紹介。同じ高校教師のための「仕事のできる先生だけがやっている一モノと時間の整理術」「高校教師のための授業術」とあわせて、現場に即したアドバイスやヒントがコンパクトにまとまっている。

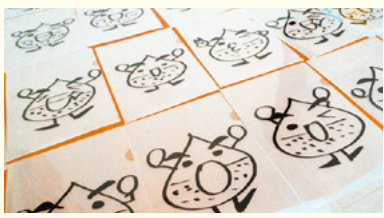
【profile】

現役私立高校教師。大学卒業後、念願の高校教師になるが、理想と現実の違いを痛感し、退職。飲食業や塾講師などの他業種を経て、効率的な働き方、幅広いコミュニケーションスキルを習得。改めて教職を選び、現在にいたる。書籍の執筆に加え、2021年3月からはコロナ禍でも先生方がオンラインで学べるYouTubeチャンネル「先生サロン」(https://bit.ly/30aWx7o)をスタート。

● 栗田先生が工夫する「配付物のルール」

栗の絵を描いた「栗ファイル」を生徒たちに1枚ずつ配り、保護者宛文書の専用ファイルとして使用。

- 1 保護者宛の文書やお知らせは、必ず「栗ファイル」に入れる。
- 2 帰宅後、空でも必ず「栗ファイル」を保護者に渡す。
- 3 翌朝、保護者からの返信等があれば、「栗ファイル」に入れて学校に持参する。



● 若手教師に贈る栗田先生のアドバイス

「安心なクラスづくりには、教師自身の安心感も非常に大切です。そのためには、ここで挙げる3つの勇気がとても大事だと、私自身の体験から実感しています。ぜひ参考にしてみてくださいねと思います」

3つの勇気

「辛いと言える勇気」

何事にも真面目な先生は、1人で抱え込みがち。周囲の人に「辛い」と言える勇気をもってください。

「嫌われる勇気」

年度終わりに向かうとき、いつまでも自分を頼らせるのではなく、徐々に生徒との距離感を保つことで、次年度の担任のクラス運営に支障が出ないよう、意識しています。翌年以降も生徒が生き生きしていけるように、子離れならぬ、生徒離れも必要です。

「『わからない』と言える勇気」

わからないことやできないことを、生徒に言うことも必要です。自分の失敗体験も然り。アフターフォローを徹底し、それがむしろ、生徒からの信頼につながります。

「心の副担任をもて」と勧めるという。「高校生になれば、自分が相談しやすい先生と相談しにくい先生がいて当然です。いざというとき相談したい相手を生徒自身が見つけておけると、安心して高校生活を過ごすことができると思います」

小さな工夫の積み重ね

コロナ禍が長引く中で、生徒が安心できるクラスづくりは重要性を増しているのではないのでしょうか。そこで今回は、『高校教師の学級経営』の著者・栗田正行先生に、生徒と教師・生徒同士の関係づくりの基盤となるクラス運営のコツを伺いました。

取材文／清水由佳(ライター・キャリアカウンセラー)

心の距離を近づけて 生徒が安心できるクラスづくり

生徒同士の会話を誘発する仕掛けが 安心感につながる

昨年から、クラスの雰囲気づくりや人間関係づくりに役立っていた学校行事や部活などが中止となり、生徒の間には、人とのつながりが弱くなることへの漠然とした不安が広がっているのではないだろうか。国立成育医療センターが昨年11月から12月にかけて実施した『コロナ×こともアンケート第4回調査報告書』でも、「学校の行事がなくなると友達との仲が深まりにくい。男女の壁も大きく高校生活が思い描いていたものとは大きく異なって楽しいことがないです。どうすれば前向きに考え、楽しく過ごせますか(高校1年生)」といったコメントがある。

私立高校でクラスを受け持つ栗田先生も、昨年4月から2カ月間実施した休校中のオンラインLHRにおいて、生徒が友達と「話したい」欲求に駆られていたのを実感したという。

「3年間クラス替えのない進学クラスを3年次から担当したので、生徒同士はある程度お互いを知っていたはず。ただ、しばらく会っていないかっただけで、私はみんなとは初対面だったので、自己紹介に時間をかけてもらったんです。すると、これが予想以上に大盛り上がりで、話すのが苦手で最初は頭の一部分くらいしか映っていない生徒も、みんなからいろいろな話しかけられたりしているうちに、笑顔で顔出ししていたり。結局、2週間分のLHRを生徒同士が話す会に充てました」

その後も、HRで扱う内容に関するアンケートを実施して、生徒それぞれの意見や考えを学級通信という形で配り、生徒同士の会話のきっかけづくりを意識した。

「いろいろな伝達事項を抱えた教師は、自分が話すことに意識が行きがちです。しかし、生徒が安心できるクラスづくりには、オフェンでも生徒が自分のことを話せて、わかってもらえるという安心感が大切だと私は考えています」

また、クラス運営をしていくうえで、担任である教員と生徒の関係づくりも重要。

「特に、最初に教員自身がしっかりと自己開示することが大切です。自分が何を考え、どんな人生を送ってきたのか。特に、生徒は教師の失敗談に興味津々です(笑)。こちらが腹を割って話すことで、「この先生の言うことなら聞こう」と思ってもらえるようになると思っています」

口頭での自己紹介だけでなく、自分のプロフィール情報を保護者にも伝えるように、学級通信として学年初めに配る。

「高校生にもなると、なかなか情報が生徒から保護者に伝わりづらくないです。しかし、クラス運営においては、保護者にも知っていたかいないかという不安な要素がたくさんあります。情報には、受信者責任と発信者責任という考え方があり、聞いたことがありますが、私は、圧倒的に発信者責任が大きいと考えています」

保護者に情報がちゃんと伝わるために、学級通信を作成したり、三者面談や保護者会などでの口頭の機会を活かし、連絡網ではなく先生から一斉に情報発信できるメッセージングリストを作成したりと、栗田先生はあの手この手で工夫する。そのうちの1つの取り組みが、生徒全員に配る「栗ファイル」を使った保護者への連絡手段(左記参照)。

「生徒を介して保護者に情報が届く割合に、7・5・3の法則(小学校7割、中学校5割、高校3割)がありますが、それをいかに打開するか。情報をしっかりと届けていくことで、保護者との心の距離を縮めていく取組も、安心感のあるクラス運営には大切だと考えています」

生徒の「定常」を高め、生徒と共に歩む

生徒が安心できるクラスづくりには、生徒が過ごす教室の環境を整えることも欠かせない。そのため、新しい学年が始まる前に教室内をチェックして、掲示物の出し方などを工夫する先生も少なくないはず。

「特に第一印象というのは大切で、最初に整っていないところを見せてしまうと、『この教室はこの程度でいいんだ』と生徒が無意識に反応し、教室の雰囲気さがらしくなりがちです。そのため、生徒がよく目にする掲示物などだけでなく、清掃ロッカーの中まで整え、最初に良いものを示し、「定常」を高めることを意識しています」

さらに、換気の徹底などもただ指示するのではなく、なぜそれを行う必要があるのか、その理由をしっかりと説明することも大事だという。

「小・中学生に比べ、自我が発達している高校生には、すべてを教師主導で進めると自立を妨げるだけでなく、反感を買うこともあり得ます。自ら考え、行動してもらおう。そのためには、教師が言うことを徹底させるといっても、生徒と共に歩むというスタンスが望ましいと考えます」

自立を促す意味でも、生徒には「心の副担任をもて」と勧めるという。「高校生になれば、自分が相談しやすい先生と相談しにくい先生がいて当然です。いざというとき相談したい相手を生徒自身が見つけておけると、安心して高校生活を過ごすことができると思います」

高校生の主体的な進路選択を応援する先生のための進路指導・キャリア教育専門誌

Career Guidance

編集協力委員を募集中です



「キャリアガイダンス」はこれからも、最前線で進路指導やキャリア教育に向き合う先生方と共に誌面を作ってまいりたいと思います。毎号の読者アンケートや、年数回の編集部からのアンケートにご協力いただく編集協力委員にご登録いただけますと、『キャリアガイダンス』を毎月お手元にお届けいたします(年5回・無料)。進路指導やキャリア教育に関する最新のテーマやトピックス、独自の統計データなど読み応えのある内容となっています。ぜひ多くの先生方にご登録いただけますと幸いです。

- お申し込み方法
- 1 お名前
 - 2 メールアドレス
 - 3 ご自宅住所
 - 4 勤務先高校名
 - 5 校務分掌
- を明記のうえ、下記アドレスにメールください。
※高校教員以外の方はご応募いただけません。

バックナンバーの記事は
WEBサイトからご覧いただけます!

キャリアガイダンス 検索

career@r.recruit.co.jp